

美術随想(10)

ウォーナー塔碑の建立(その3)

大和文華館々長 石澤正男

「美のたより」40、41の2号にわたりウォーナー塔碑の建立に関して概略をお伝えしたわけですが、この号では最後の締めくくりをしておきたいと思えます。この碑文は日英両文で誌されていることは、すでに申しあげてありますが、先ず日本語の全文を御紹介することにします(写真参照)。

ウォーナー塔

ラングドン・ウォーナー博士は1881年8月1日、米国マサチューセッツ州エセックの名門に生まれ、1903年ハーバード大学を卒業。その後間もなく来日し東洋美術の偉大な先覚者岡倉天心の知遇を得、天心門下の横山大観、下村観山、菱田春草、新納忠之介を始め多くの日本人と親交を結んだ。法隆寺の佐伯定胤大僧正もその一人であった。

博士は東洋美術全般に深い関心を抱かれ、中国大陸には再三にわたり艱難に耐えて古美術調査旅行を敢行され、多くの貴重な収獲を米国にもたらされた。然しながら博士の最も深い関心を惹いたのは吾が飛鳥・奈良時代の古代彫刻であった。博士ほど日本を愛し、日本美術を真に理解した人は稀である。博士は日本にとって最良の友であった。

博士は1906年より1913年まで岡倉天心の部下としてボストン美術館支那日本部に勤務された。その後はクリーブランド美術館研究員、ペンシルバニア大学附属美術館長を歴任されたが、1923年に母校ハーバード大学附属フォッグ美術館東洋部長に迎えられ、傍ら母校の講師として1951年まで東洋美術史の講義を担当し、その門下からは多くの優れた学者を世に送り出さ

れた。

第2次世界大戦中、博士は連邦政府に設けられた「戦争地域における美術的並びに歴史的遺蹟の保護に関する委員会」に働きかけ奈良・京都を戦禍より救うために献身的努力をされたことは、博士自身の否定にも拘らず、疑う余地のない事実である。

戦後博士は再度来日され、その都度多くの日本人から熱狂的歓迎

かりであった。結局博士の未亡人ロレーン夫人の意向によりこの地が選ばれ、博士の遺徳を偲ぶよすがとして「ウォーナー塔」が建立され、1957年11月3日その除幕供養会が営まれたのである。

1973年6月9日
(英文は裏面に)

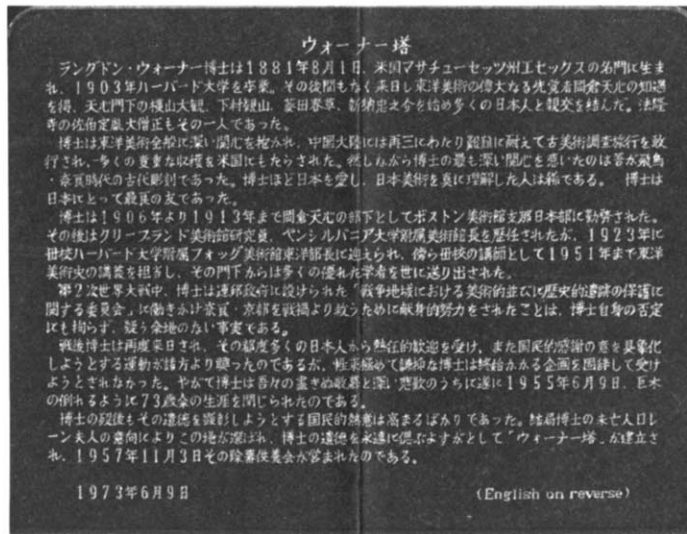
ウォーナー塔落慶供養会の式次第は当時の法隆寺聖徳宗管主佐伯良謙大僧正の表白に始まり、以下聖

徳太子奉讃会総裁久瀨朝融氏の頌徳文、ボストン美術館アジア部長富田幸次郎氏の挨拶、外務大臣藤山愛一郎氏の祝辞、ダグラス・マッカーサー2世のメッセージ(英文)、文化財保護委員会を代表して矢代幸雄委員の歎徳文、奈良県知事奥田良三氏の挨拶、法隆寺信徒総代・法隆寺保存協議会々長今村荒男氏の歎徳文の朗読で式は終了したのであります。当日出席のできな

った未亡人ロレーン・ウォーナー夫人よりの感謝の電報は翌日配達された由で、式場では披露されず、ただ記録にだけ止められています。この式場で朗読された歎徳文その他にはいづれもウォーナー博士が生前最も愛着の念をもたれていた法隆寺境内に塔が建てられたといわれておりますが、最初に書きましたように、実際の場所は法隆寺西院を囲む土塀の外側であること、それから以前は西院境内にあった平子鐸嶺供養塔を、わざわざ移動してウォーナー塔と同一の玉垣に囲まれた基壇の上に並列したのはどのような理由からか、私には判りません。現在の場所は1957年当時は見晴らしがよく、²¹⁾そこから五重塔や金堂がよく眺められたそうですが、今では松や雑木が生長して視野に入るのは樹木ばかりであり、そこへゆく道標もないため、訪れる人も減多にならないようです。昨秋ウォーナー門下のアメリカ婦人で元ミルス大学教授のキャスリン・コードウェル女史を案内しましたが、同女史は建立の由来を日英両文で刻んである立派な石碑を見て非常に喜んでいました。ただどうして人目を特に避けたようなあの場所が選ばれたかを不審に感じたようでした。これは日本人にも共通した感想であろうと思えます。

書きたいことはまだ沢山ありますが、ただ一つ、鐸嶺塔にも是非その建立の由来を誌した石碑を作って戴きたい。その点について平子家と法隆寺側の御協力による実現を切望してやみません。

(この項終り。53・2・27)



を受け、また国民的感謝の意を具象化しようとする運動が諸方より興ったのであるが、性来極めて謙抑な博士は終始かかる企画を固辞して受けようとしられなかった。やがて博士は吾々の尽きぬ敬慕と深い悲歎のうちに遂に1955年6月9日、巨木の倒れるように83才余の生涯を閉じられたのである。

博士の歿後もその遺徳を顕彰しようとする国民的熱意は高まるば

徳太子奉讃会総裁久瀨朝融氏の頌徳文、ボストン美術館アジア部長富田幸次郎氏の挨拶、外務大臣藤山愛一郎氏の祝辞、ダグラス・マッカーサー2世のメッセージ(英文)、文化財保護委員会を代表して矢代幸雄委員の歎徳文、奈良県知事奥田良三氏の挨拶、法隆寺信徒総代・法隆寺保存協議会々長今村荒男氏の歎徳文の朗読で式は終了したのであります。当日出席のできな

季刊 美のたより No.42

昭和53年4月1日

発行 大和文華館